公益財団法人
浦上食品・食文化振興財団
URAKAMI FOUNDATION

財団ニュース 2018

2018年２月発行

CONTENTS

● 理事長挨拶
● 学術研究助成事業
• 近年助成した研究からご紹介

● 食文化の振興・啓発および協賛活動
• 浦上ランチプロジェクト（ラオスにおける学校給食プロジェクト）
• H29年度東日本大震災復興支援事業
• カレーアクション事業を後援
• フードピア金沢を支援
• 読売写真ニュースを学校に寄贈

● 食品産業功労賞特別賞受賞
● 事務局より
• お知らせ
• 編集後記

理事長挨拶

最近、地球上では毎年想定外といわれる気象状況で、世界各地で台風や洪水が起こっています。また、政治的には自由主義圏のリーダー的立場をかなぐり捨て、アメリカファーストのトランプ政権で秩序を失っています。

このような環境の下、日本は安倍首相が長期政権を保ち、経済的には安定成長を続けています。株価も飛躍的に上昇し、私共浦上財団にとりましても基本財産であるハウス食品グループ本社株が安定成長し、配当も年々増えています。おかげさまで、浦上財団の主たる活動である食品の加工技術、食と健康及び食品の安全性等に関する研究に対する助成金もこの平成29年度の助成金で累計10億円を超えました。丁度この財団の設立を志していた亡き主人の33回忌の年になります。今年は私にとり記念すべき年になりましたが、もう一つ大変光栄な嬉しいこともありました。日本食糧新聞社制定の食品産業功労賞顕彰50回記念特別賞に香川栄養学園学園長 香川芳子氏、日本病態栄養学会常任理事金谷節子氏とともに受賞しました。主人の遺志を継ぎ、財団の理事長になった私は、主人をはじめ多くの皆さまにお支えいただき今日を迎えることができました。心より感謝いたしております。

二月に開幕する平昌冬季五輪では、南北朝鮮が統一旗を先頭に合同入場行進を行うらしいと伝えられています。大陸間弾道ミサイルを打ち上げ、開発続ける金正恩朝鮮労働党委員長と南北融和を主張する文在寅韓国大統領に私たち日本人はどうしたらいいのでしょうか。

昨年、天皇陛下自ら天皇としての業務の遂行が難しいと公表されました。内閣は皇室会議を招集し、平成31年４月30日に譲位され、翌５月１日に改元し皇太子殿下が新天皇になられることが決定しました。

私ども浦上財団も４月から始まる新年度が平成での最後の活動となります。新年度では、ラオスランチプロジェクトは様々な関係者との連携をとりつつ新しい委託先を視野に入れなお一層充実していこうと思っています。また、東日本大震災復興支援についても震災後７年が近づき被災者の高齢化も進み様々な支援のニーズを感じます。引き続き「継続は力なり」の精神で頑張ってまいります。

これもひとえに日頃よりご支援いただいている皆々様のおかげと心より御礼申し上げます。どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

◀食品産業功労賞贈呈式での浦上節子理事長

主な活動紹介

学術研究助成事業

学術研究助成事業は財団設立以来の当財団の重要な活動のひとつです。研究テーマ１件当たり３百万円を限度とする通常の助成額は食に関する研究助成の中では高額にあたり、これは、設立当時の選考委員の助言で、少額を多くの人に配るよりも、まとまった額の助成の方が、研究がしっかりできるとのアドバイスを受けてのことです。

ホームページや研究機関へのはがき等で広く応募者を募り、６月１日から７月10日の申請期間に198件の応募を受付けました。9月上旬、学識経験者で構成される選考委員会で厳正な審査を経て研究助成16名の研究者への助成を決定しました。

贈呈式は10月22日にホテルニューオータニにて行われました。浦上理事長の「浦上財団のロゴ“食”は“人”に“良い”と書くよう人間にとって一番大事なものが食で、その食を研究なさっている特に若手の研究者の皆様の成果で様々な分野で活躍なさることを期待しています。」との挨拶に続き、伏木選考委員会議長より選考経過の説明と研究者の方々への激励がありました。続いて各研究の代表者に理事長から目録が贈呈され、目録を手に各代表者が研究内容についてスピーチされました。

懇親会では打ち解けた雰囲気のなか積極的な意見交換が行われました。おかげさまでこの32年間の助成件数は383件、助成金総額は10億３千万円超となりました。

助成した研究の成果は、浦上財団研究報告書としてまとめられ、これまで24号まで発刊されています。今年度も25号を発行いたします。今までの研究の一例を後ページに掲げました。一般の方にも解りやすい文章で寄稿していただきましたのでご一読ください。

理事長より贈呈書を受け取る研究者

懇親会風景

集合写真

～近年助成した研究からご紹介～

当財団が助成している研究の多くは学術的・専門的ですが、「食」は私たちの日常にも大きくかかわってきます。そこで 2017年3月発行した浦上財団研究報告書Vol.24に掲載された研究報告より2名の先生に研究の成果を解りやすく書き下ろしていただきました。

平成26(2014)年度助成

「アルツハイマー病治療に有用な脳移行性クルクミン含有質ナノカプセルの開発技術に関する基盤研究」

名古屋市立大学・大学院薬学研究科　田　上　辰　秋

この研究は、アルツハイマー病の疾患部位である脳組織に効率的に化合物を送達できるようなドラッグデリバリー技術を開発することを大きな目標とし、脳組織指向性*をもつような機能性ナノカプセルの開発を行いました。研究の前半では、アルツハイマー病を含む様々な炎症関連疾患に有効とされる、抗酸化物質のクルクミンを高効率でカプセル内に含有させることを試みました。私は、これまでに生体膜構成成分であるリン脂質から構成されるリポソームを研究対象として研究を行ってきました。リポソームは、生体親和性の高い優れた脂質ナノカプセルとして知られていますが、脂溶性物質をカプセル内に高効率で含有させることは難しいことが知られています。私は、シクロデキストリンという環状オリゴ糖に注目しました。クルクミンをナノカプセル内に受け渡すドナーとしてシクロデキストリンを用いたところ、ナノカプセル内に高効率で輸送させることができました。他の脂溶性化合物においても同様の結果が得られたことから、応用性の高い技術が開発できたと考えています。研究の後半では、ナノカプセルの表面に、ラクトフェリンという牛乳中に含まれていることで知られているタンパクを結合し、脳組織移行性*について検討しました。マウスを用いた動物実験を行ったところ、ラクトフェリンを結合していないナノカプセルと比較し、有意に脳組織移行性が高まることを見出しました。このナノカプセルは脳組織指向性をもった安全性の高いナノカプセルとして期待できると考えています。

* 事務局注

脳組織指向性：脳にのみ特別に移動し蓄積するような性質。

脳組織移行性：脳に目的の物質が移動する程度。
脳は外からの異物が侵入しないように栄養分や特殊な物質以外は侵入できない構造であるため、脳に物質が移動する程度を調査することが重要。

平成27(2015)年度助成

「発生方法が異なるオゾンマクロナノバブルを用いたカット野菜の洗浄効果」

明治大学農学部　玉　置　雅　彦

熱帯魚飼育などで水槽中への通気に用いる気体の気泡粒径は数mm程度であり、発生後に急速に水中を浮上して水面で破裂し消滅する。しかし、マイクロナノバブル(MB)と呼ばれる粒径50μm*以下の微細な気泡は、通常の気泡よりも浮上速度が遅く、MBの性質である自己加圧効果により気泡が縮小しながら完全に水中に溶解するため、通常の気泡よりも効率的に気体を溶解させることが可能である。

MBの発生法には様々な方法があるが、中でも気液旋断法および加圧溶解法がよく知られている。気液旋断法は50μm付近、加圧溶解法は20μm付近に気泡径分布のピークがある。両MBには気泡の基本的な理化学的特性に差異は無いが、気泡数や気泡径分布などが異なるため、気体の溶存濃度や水中でのフリーラジカル*発生量が異なる。著者は、今までにオゾンMB(O_3MB)を用いて上記のMBの発生方法の違いと青果物からの残留農薬除去効果ならびに植物病原菌の殺菌効果との関係を検討し、加圧溶解法は気液旋断法よりも農薬除去効果および殺菌効果が高いことを認めた。そこで本研究では、発生方法が異なるO_3MBがカット野菜の洗浄効果に及ぼす影響について検討した。

実験の結果、カット野菜の洗浄効果に対するO_3MB処理には発生方法による差異は認められなかったが、従来処理法の塩素処理と比べて、カットキャベツの大腸菌群数の増加を抑制し貯蔵性に優れることが認められた。今後、塩素処理に代わる洗浄法としてO_3MBの利用が期待される。O_3MBによる洗浄効果を高めるため、またMB発生方法との関係を明確にするために、今後は溶存オゾン濃度ならびに処理水温との関係から、カット野菜の洗浄効果について明らかにしたい。

* 事務局注

μm：マイクロメートル。1000μm ＝ 1mm

フリーラジカル：細胞を構成する分子の内、電子が不安定なもの。体を錆びさせ老化や様々な病気の原因になり、代表例が活性酸素。

食文化の振興・啓発および協賛活動

■ 浦上ランチプロジェクト（ラオスにおける学校給食プロジェクト）

ラオスは東南アジアの後発発展途上国の一つです。貧しい家庭の子どもは毎日の食事が充分でないため授業中お腹がすいて授業内容についていけなくなってしまったり、昼食に一度帰宅すると畑仕事や家事・弟妹の世話などで午後の授業は出席できなかったりします。また、野菜不足により栄養バランスをとることが難しいといわれています。

浦上財団は平成24年度から就学率向上や子供たちの学力・体格の向上、お母さん方の栄養知識の向上をめざし、ラオスで長らく活動している公益財団法人 民際センターに委託して自立型学校給食モデル事業を始めました。3年で資金の援助を卒業し自分たちでランチを実施していけるように、校庭の一角に畑を作ったり鶏を飼ったりなどして教師と生徒が食材を育て、また村人もランチの調理や畑の管理を担うなど協力してプロジェクトにあたってきました。しかし事業を成功させたいという気持ちの高まりはみられるものの、ランチに必要な収穫量を維持する農業活動の技術と知識や会計のノウハウを自立するに足りるレベルまで身に着けるには、3年という期間では不足していることが明らかになりました。浦上財団は今後もラオスに関係する様々な人達との連携を含め、熱い情熱をもって地に足の着いた支援を続けてまいります。

さらに、昨年9月駐ラオス大使館ビロード・スンダラ大使閣下に表敬訪問を行い、浦上財団の取組を説明するとともに、今後、浦上財団と連絡を取り合い両国発展のために協力していきたい旨のお言葉をいただいたところです。

駐ラオス大使館ビロード・スンダラ大使閣下と浦上理事長

カレーアクション事業を後援

昨年に引き続き今年も農業王国で地産地消に取り組む北海道と九州（4月札幌市、7月福岡市）における「カレーアクション」に後援しました。札幌フォーラムでは、スピードスケートオリンピックメダリストの清水宏保氏による講演に続き北海道各地の食材を使ったカレーの試食があり、九州会場ではインド・スパイス料理研究家の香取薫氏による講演と九州各県特産の夏野菜を使ったカレーの試食などによるPRがありました。

札幌会場

福岡会場

❊ 東日本大震災復興支援事業 ❊

東日本大震災から７年近くが経ち、復興住宅や自立再建した自宅への移転で新たなコミュニティ形成が課題になったり、震災以降一部区間の運航が再開していないJR常磐線の全線開通が2020年春に見通しが立つなど、帰還者が増えることが期待されたりしています。同じ 7 年近くでもその地域ごとで復興フェーズもニーズも変わりますが支援のニーズは存在しています。

浦上財団は今年度までに延べ34件、2800万円弱を支援してきました。今年度は昨年10月一カ月間の申請期間に岩手県４件、宮城県８件、福島県５件の計17件の申請がありました。11月の選考委員会で今年度の支援団体を決定し、本年１月15日に仙台JALシティホテルで贈呈式を行いました。「継続は力なり」で微力ではありますがまだまだ復興支援事業を続けてまいります。

贈呈書を渡す理事長と支援団体関係者　１月 仙台での贈呈式にて

～昨年支援した活動からご紹介～

特定非営利活動法人 故郷まちづくりナイン・タウン
専務理事　伊　藤　寿　郎

東日本大震災から7年が経過しようとしている現在、被災した多くの住民は災害公営住宅などへの移住が進む一方で、未だに2,500人を超す行方不明者が居る中で、沿岸被災地の地域資源を活かして自立型の復興を目指して南三陸町歌津地区に「南三陸直売所みなさん館」を営んでいます。開設は震災翌年の10月で、野菜や果物、味噌や梅干し、塩蔵ワカメや乾物類、海産物加工品などの販売や地域住民の生活の支えになるお弁当などの惣菜や飲食ブースの営業を始めました。しかし、予算の関係で海水を満たした生簀（いけす）を設置することができず、住民や漁師からの希望があった活きたままの牡蠣、ほたて、うに、たこ、あわびなどの海産物を安定的に販売する設備がなく、毎日海水を運んで交換しながら少量ずつの販売でした。平成28年度・29年度の2年間にわたる財団からの助成により、初年度は販売スペースの拡張と水槽設備の導入、2年度目は水槽設備の機能強化のための濾過器や循環装置の設置、牡蠣焼き用具への助成をいただき、売上高は150%の伸びを得ることができました。漁師さんたちも少しずつですが出品が増えているとのことですので励みになっております。

震災前からの地域課題がその影響で更に大きな問題となる被災地の復興は、多くの困難を抱えていますが、私たちは隣町のNPOとして、寄り添って自立型復興支援を続けてまいりますので、今後ともご支援をお願い申し上げます。本当にありがとうございました。

生簀本体をH28年支援にて、
棚上の白い循環・濾過装置をH29年度支援にて設置

フードピア金沢を支援

独自の食文化と石川県の冬の日本海の海の幸・加賀野菜を紹介する食のイベント「フードピア金沢」は毎年２月に金沢市及びその周辺地域で開催され、今年は32回目でした。当財団は第１回（1985年）より支援しています。

北陸新幹線の開通により、首都圏からのアクセスが便利になりました。従来の金澤老舗よもやま話などに加え金沢の町屋“食”めぐりなど新しいプログラムを開始するなど第32回では残したい古い伝統は守り新しいものを加えていく金沢らしいイベントとして発展しています。

金澤老舗よもやま話で金沢の文豪泉鏡花の作中に出てくる金沢の食について話す泉鏡花記念館学芸員の穴倉氏。
八寸は節分の季節を取り入れて

読売写真ニュースを学校に寄贈

浦上財団の標語『「食」は「人」に「良」いこと、元気のもと』をパネルに用い、「食育」に熱心に取り組んでいる小学校を軸に46の中学校、高校、図書館に教材資料として毎週写真ニュースを提供しています。

小学校等に寄贈しているパネルの一例

広報活動

研究報告書の発行

助成した研究のうち2016年秋までに報告をいただいた17件を浦上財団研究報告書Vol.24にまとめ2017年3月に発行し、全国の研究機関附属図書館や都道府県立図書館にお送りしました。また、2017年の秋までに当財団に提出された研究報告を収めた研究報告書Vol.25を今年3月に発行する予定です。

財団HPのリニューアル・財団リーフレットの配布、財団ニュースの発行

研究助成事業や復興支援事業の告知、申請や結果発表をはじめ、当財団の活動をHPにてお知らせしております。また研究助成事業と震災復興支援の申請をオンライン申請にし、助成対象者との連絡をマイページでのやり取りとし利便性を高めています。

他にも財団の事業活動や寄付金の募集活動などを紹介したリーフレットや写真を多く使って2月にその年度の活動をまとめた財団ニュースを発行しております。

栄えある 食品産業功労賞特別賞受賞

日本食糧新聞社制定（平成29年度）農林水産省後援「第50回食品産業功労賞」において食品産業功労賞50回記念特別賞の栄誉を賜りました。贈呈式は、昨年11月10日明治記念館において執り行われ、記念講演では、小泉純一郎元内閣総理大臣が、「日本の歩むべき道」と題し講演いただき、業界を代表する企業のトップの皆様をはじめ、石破 茂（元地方創生担当大臣）斎藤 健（農林水産大臣）など多くの来賓を迎え盛大な贈呈式でした。浦上節子理事長も大変名誉な賞を頂くことができ、今まで無我夢中で歩んできた財団の活動が評価を受け、大きな喜びとともに今後なお一層の活動を決意した日となりました。

❊ ❊ ❊

事務局より

お知らせ

浦上財団は公益財団法人ですので、ご寄付くださった皆様が減税を受けることができます。当財団からお送りする寄付領収書を添付して所得税の確定申告をなさってください。（2011年に設けられた税額控除には当財団へのご寄付は適用されません。）また、当財団は東京都条例により個人都民税の寄附控除が受けられる団体として指定されております。都内にお住まいの方は住民税欄・都民税の寄付金控除のご記載もどうぞお忘れなく (*^-^) b

● 編集後記

ラオスのランチプロジェクトの特徴の一つに現金支出をできるだけ軽減するプログラムがあり、学校給食用の野菜・魚類を校庭の一部を活用して自ら育てていることです。地域に優れたリーダーがおり、子供たちへの給食の重要性を理解している村であっても厳しい雨季や乾季と闘いながら収穫を確保するのは難しく、その熱意をサポートする知識や支援の必要性を感じます。同じことが復興支援にも当てはまり、熱意ある人たちの連携の重要性を感じた1年でした。常務理事はじめ浦上財団事務局も交代し事業部長、総務部長の新体制で熱い心をもってこれからも頑張ります。

（大豆生田 清志：浦上 佳江：戸田 俊一）

〈お問い合わせは下記まで〉

公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団
〒102-8560 東京都千代田区紀尾井町 6-3　ハウス食品グループ本社ビル
電話：050-3532-6365　FAX：03-3264-6188
URL: http://www.urakamizaidan.or.jp（お問い合わせはHPのお問い合わせフォームをご利用ください。）